

重要文化財
武雄鍋島家洋学関係資料
保存活用計画書

令和4年10月

武 雄 市

序

武雄の地に残された貴重な資料を今後も守り伝えていくとともに、先人の先進の姿勢を将来へ向けての文化によるまちづくりの中で活かしていくことは、歴史的資産を受け継ぐ現代の私たちの使命であります。

武雄市は、令和4年秋に西九州新幹線が開業し、西九州エリアの交通結節点として、人やモノが交流する拠点『西九州のハブ都市』としての存在感が更に高まります。これを機に、全国から、世界から、たくさんの方に武雄市へ来ていただくためにも、「武雄鍋島家洋学関係資料」を観光の核の1つとして発信していく必要があります。

本計画は、「武雄鍋島家洋学関係資料」を適切に管理・運用し、良好な保存環境の維持に努めるとともに、市民や観光客が蘭学に親しめるような活用を行い、次世代へ伝えていくことを目的として策定したものです。

今後は、本計画に基づきながら、市民協働の中で「武雄鍋島家洋学関係資料」の保存と活用の推進に取り組んでいきたいと考えています。

最後になりましたが、本計画策定に当たり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に深く感謝の意を表すとともに、今後ともご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年10月

武雄市長 小 松 政



例 言

- 1 重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料保存活用計画（以下、本計画）書は、佐賀県武雄市武雄町大字武雄 5304 番地 1 の武雄市図書館・歴史資料館に所在する「重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料」の保存活用計画書である。
- 2 本計画は令和元（2019）年・2 年・3 年度（令和 4 年 10 月まで期間延長）の継続事業として、国庫補助事業文化庁文化資源活用事業費補助金（観光拠点整備事業）の交付を受けて実施した。
- 3 本計画は、「重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料保存活用計画策定委員会」を設置し助言を求め、文化庁・佐賀県の指導を得ながら、武雄市教育委員会文化課が事務局となって取りまとめたものである。
- 4 委員会の構成および経過については、巻末に掲載している。
- 5 本計画の作成にあたり、次の機関から協力と助言をいただいた。
都城島津邸 中津市歴史博物館

目 次

序 武雄市長 小松 政

例言・目次・口絵図版

第1章 計画策定の目的と期間	1
1 対象となる資料の概要	1
2 計画の目的	1
3 計画の位置付け	2
4 計画期間	3
第2章 武雄市の概要	4
1 武雄市の概要	4
(1) 概要	4
(2) 自然環境	4
(3) 社会環境	6
① 交通	6
② 産業	6
③ 観光	6
(4) 武雄鍋島家の歴史的概要	8
第3章 「武雄鍋島家洋学関係資料」の概要	9
1 資料の概要	9
2 歴史的概要	10
3 重要文化財指定までの経緯	13
(コラム) 重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」の価値 川副義敦	14
第4章 現状と課題	16
1 施設の概要について	16
(1) 資料の収蔵・展示施設について	16
(2) 施設の特徴	18
(3) 施設周辺の環境	19
2 資料の保存・管理について	20
(1) 資料の管理など	20
(2) 保存修理事業	21
(3) 防災・防火	26
(4) 保存環境	29
(5) 有害生物被害対策	31

3 資料の活用について	32
(1) 展示環境の概要	32
(2) 資料の展示	33
(3) 資料の公開と学術的活用	38
(コラム)「長崎方控」刊行の意義について 鳥井裕美子	39
(4) 教育活動	40
(5) 観光面での活用	40
第5章 保存活用計画	43
1 基本方針	43
2 適切な保存について	45
(1) 資料の管理	45
① 日常的な資料の管理	45
② 「武雄鍋島家洋学関係資料」の総点検	45
③ データベースソフトによる管理用台帳の作成	46
④ 資料のデジタル化の推進	47
(2) 保存環境の整備	48
① 収蔵スペースの確保	48
② 保存環境の点検と良好な環境の維持	48
③ 防災対策	51
④ 防犯対策	53
(3) 計画的な修理	54
① 資料の状態確認事業	54
② 国指定重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」保存修理事業の推進	54
3 適切な活用について	60
(1) 計画的な公開	60
① 資料の展示	60
② デジタルを利用した資料の公開	61
(2) 学術的活用	63
① 文書・記録類の記載内容の整理	63
② 研究成果、デジタル資料などの蓄積	64
(3) 教育活動	65
① 小中高校生向けの活動	65
② 一般向けの活動	66
(4) 観光面での活用	68
① ボランティアガイドと連携した活動	68
② 広域連携、民間連携による活動	69
③ インバウンド客への対応	70

【巻末資料】

・ 保護に関する諸手続き	77
・ 関係法令	80
1) 文化財保護法（抜粋）	80
2) 文化財保護法施行令（抜粋）	87
・ 重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料保存活用計画策定委員会の構成および経過	88
・ 重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料一覧	90



ながさきかたひかえ
 「1. 文書・記録類」734～737：長崎方控二～五



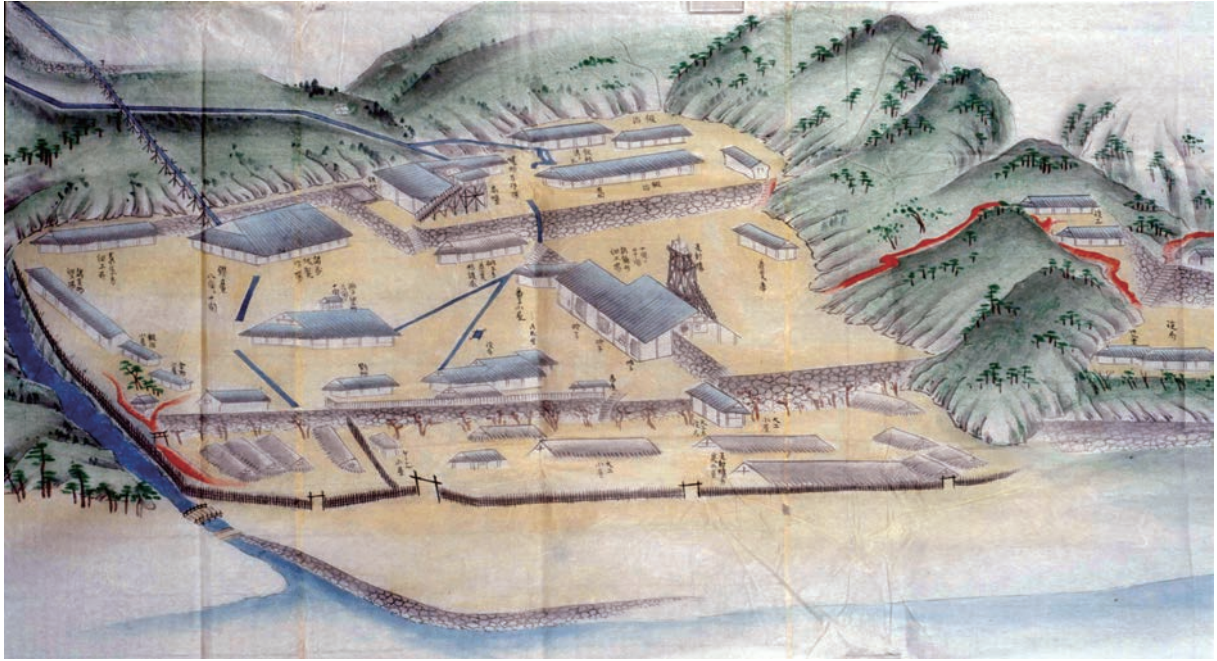
さくよう
 「2. 標本類」1：〔植物標本帳〕、2～4：腊葉〔植物標本帳〕



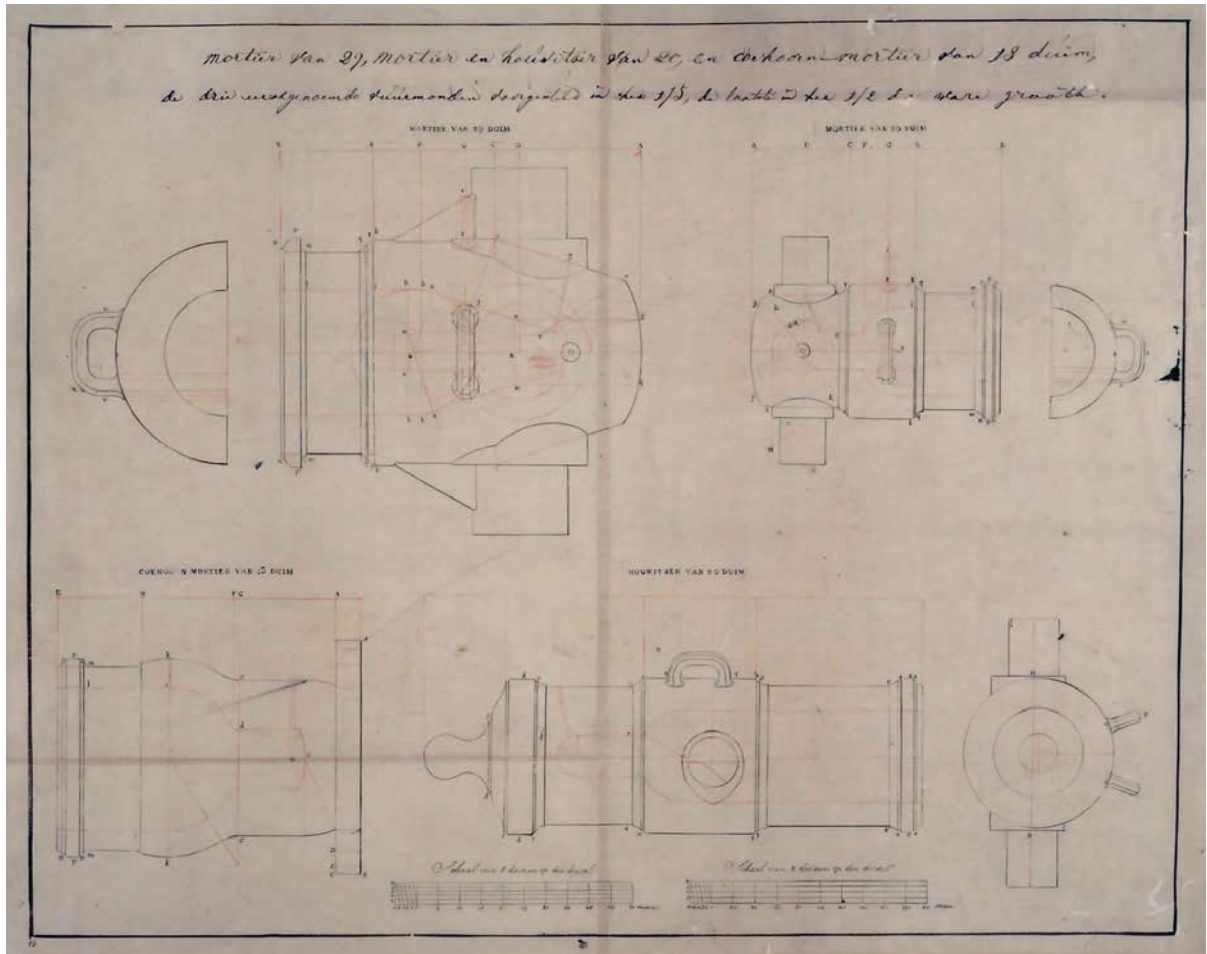
「3. 和書・訳書類」224：ボンベカノンII、226：[ボンベカノン]



「4. 洋書類」武雄蘭書 たけおらんしょ



「5. 絵図・地図類」24: 薩州鹿兒島見取絵図／
いそべつてい さつしゅうか ごしまみとりえ ず
けくらむらどうみきためしほう しゅうせいかん おぶんかくだい
 (磯別邸の図・華倉村銅吹試方図)(集成館部分拡大)



「6. 図面類」84: 29、20、13 ドイムモルチールと 20 ドイムハウキッスル (写)



「7. 写真」1、3～7：上野彦馬関連の鶏卵紙写真^{けいらんししん}



「8. 器物類」257：天球儀^{てんきゅうぎ}（左）、256：地球儀^{ちきゅうぎ}（右）

○長崎方控二～五（「1. 文書・記録類」734～737）

様々な物品が集積される貿易港長崎での武雄の購入記録。書籍、薬品、動植物、食品、革製品、金属製品、ガラス、陶磁器、器物類など、あらゆるものが記載されている。本来5冊から成るものだが、1冊目の行方が分からない。各冊とも、前半に注文品、後半に到来品が記録されている。記録された年代は天保9（1838）年から文久2（1862）年9月までで、鍋島茂義の逝去とともに終わる。

○〔植物標本帳〕、腊葉〔植物標本帳〕（「2. 標本類」1～4）

弘化から文久年間（1844～64）頃にかけての植物標本帳。中国・琉球・ヨーロッパ産の舶来植物の標本を収録し、名称・舶来年を記す。和名、漢名のほか、ラテン名、オランダ名が添えられているものもある。江戸時代の植物学において植物標本帳は希少で、在外種の舶来状況を知りうるだけでなく、園内で国内外の植物栽培に傾注したという茂義の科学的な姿勢を伝える貴重な資料である。

○ボムベカノンⅡ、〔ボンベカノン〕（「3. 和書・訳書類」224、226）

「ボンベカノン」はペキサンス砲とも呼ばれる破裂弾用の新式砲。この大砲の情報はアヘン戦争が勃発した天保11（1840）年に日本に伝わった。武雄ではこの年11月に「ペキサンス大砲絵図」を長崎に発注、弘化2（1845）年10月には原書を購入した。これを翌年8月までに武雄領抱えの長崎のオランダ通詞西記志十に訳させたものがこの資料である。

○武雄蘭書（「4. 洋書類」他）

武雄の旧鍋島男爵家に伝わった蘭書は、有馬成甫が昭和32（1957）年の調査にもとづき、「武雄蘭書目録」（『武雄の蘭学』昭和37年、所収）を公表して以来、「武雄蘭書」と呼ばれてきた。この目録は69部138冊を記載し、このうちオランダ語原書は59部128冊で、ほかは日本で出版された訳書が含まれている。蒐集の蘭書は、語学・理工学・医学・軍事学・伝記・旅行記・雑誌・百科辞典にわたり、赤通し、手垢、また蔵書印・署名なども見られ、使用の形跡が明らかなものも多い。

○薩州鹿児島見取絵薩州鹿児島見取絵図／〔磯別邸の図・華倉村銅吹試方図〕（「5. 絵図・地図類」24）

安政4（1857）年6月、佐賀藩士千住大之助、佐野常民、中村奇輔らが、鍋島直正から島津斉彬に贈る電信機を携えて鹿児島を訪問。その際、11代薩摩藩主島津斉彬が推進していた集成館事業の様子を細かく描いたのが、この「薩州鹿児島見取絵図」である。鹿児島城下を俯瞰する「鹿児島見取絵図」や磯の集成館事業を描いた「磯別邸の図」など、12枚18景の絵図と風説書2冊からなる。

○29、20、13 ドイムモルチールと20 ドイムホウキッスル（写）（「6. 図面類」84）

武雄には、オランダやイギリス・マンチェスターで作製された原図と、それを武雄で写したと考えられるものとのあわせて、65枚の大砲とそれに関わる旋盤・台車・牽引用具などの設計図が残る。それに加え、大小さまざまな大砲切形や、モルチール砲、ホーウィッスル砲などの絵図、口径の拓本、標的図まで、武雄での砲術研究の熱心な取り組みを示す豊富な量の資料が残されている。

○上野彦馬関連の鶏卵紙写真（「7. 写真」1、3～7）

日本の職業写真家の先駆けの1人である上野彦馬の長崎の写場などで撮影されたと考えられる6葉の写真である。写真の裏には、「引田や」「姫松（カ）」「龍田」など、長崎丸山の遊女を撮影したことを推測させる書き込みが見えるものがある。使用されている撮影用の椅子や台から、いずれも元治元（1864）年から慶応年間（1865～68）に撮影されたものと考えられる。

○地球儀、天球儀（「8. 器物類」256、257）

オランダ・アムステルダム製の地図・地球儀製作者であるレオナルド・ファルクの工房が作成した地球儀と天球儀。それぞれの収納箱には「天保十五年辰春」と書かれている。また「長崎方控 二」の天保15（1844）年2月10日の到来品に「蘭製天地球 二ツ」とあり、両者の記述が符合する。

第1章 計画策定の目的と期間

1 対象となる資料の概要

本計画の対象となる「重要文化財武雄鍋島家洋学関係資料」の概要は以下のとおりである。

文化財の種類	重要文化財（歴史資料）			
名称	武雄鍋島家洋学関係資料			
員数	2,224点			
(内訳)	一. 文書・記録類	1,304点	一. 標本類	4点
	一. 和書・訳書類	284点	一. 洋書類	133点
	一. 絵図・地図類	36点	一. 図面類	159点
	一. 写真	7点	一. 器物類	297点
指定年月日	平成26（2014）年8月21日			
所有者	武雄市			
所有者の住所	佐賀県武雄市武雄町大字昭和12番地10			
所在地	武雄市図書館・歴史資料館（佐賀県武雄市武雄町大字武雄5304番地1）			

19世紀に入ると、日本は外国との交流を極めて制限していた【鎖国】の状態から、外圧により【開国】へ向かうこととなった。この頃から西洋の学問【蘭学】が精力的に導入されるようになり、明治期以降の他に類を見ない近代化の成功を導く基礎部分が形成されていく。武雄の蘭学・洋学は、その先駆的位置にあるもので、武雄の先人たちの先見の明が日本を動かす力の1つになったともいえる。

「武雄鍋島家洋学関係資料」は、全国でも有数の規模と質を誇る洋学の資料群であり、特に九州・中国地方の洋学を語るに際しては比肩するものを見出し難い。来歴が明らかであり、後述するように導入の過程を示す文書と現物資料の双方が含まれ、未使用の合成絵具、写真撮影用の照明器具であるガルハ焼入器、ファルク工房（オランダ）の地球儀と天球儀、薩摩藩の集成館事業を記録した「薩州鹿児島見取絵図」など、他に類例がない、或いは類例が少ない資料も数多く現存している。このことから、他館での洋学関連の企画展やメディアで洋学や幕末が取り上げられるときにも、当該文化財やその画像がしばしば借用されている。

2 計画の目的

「武雄鍋島家洋学関係資料」については、これまでも【武雄の蘭学】の呼称で市民に紹介してきたが、現在でも資料の存在や価値が十分に市民に認知され、親しまれているとは言い難い現状がある。

本計画は、「武雄鍋島家洋学関係資料」の文化的・歴史的価値を広く市民と共有し、協働して次世代へ引き継いでいくことを目的として策定するものである。また昨今、文化財を初めとする文化資源について、「保存」と「活用」の両輪で取り組むことが重要となっている。

このことから、西九州新幹線の開業で増加が見込まれる観光客、特にインバウンド客（外国人観光客）に対する文化資源としての一層の活用を図る。さらに、市民が武雄の蘭学・洋学資料への理解と愛着を深め、「武雄と言えば蘭学」「蘭学のまち武雄」の意識を持つこと、将来的には市民一人ひとりが、誇りをもって情報の発信者となることを目指す。また、武雄市外から訪れるインバウンド客を含めた観光客へ当該文化財の魅力を伝え、武雄市の観光の核の一つとすることで、文化・観光・地域活

性化の好循環の創出を目指す。

「武雄鍋島家洋学関係資料」を核として市民と観光で訪れた人々との間に交流を生み出し、武雄市訪問を魅力的でより充実したものとするのが、当該文化財の価値に対する認識を広げていくことにつながる。そのことが当該文化財を保存活用していく環境整備の必要性を、市民が意識する推進力となる。

本計画の目的を達成するために、「武雄鍋島家洋学関係資料」だけではなく、その他の関連資料も視野に入れることとする。16,000余件に及ぶ武雄鍋島家資料全般および家臣の家資料などの収蔵資料や、武雄市内各所に残される資料などが対象として考えられる。武雄市の歴史、および周辺の歴史的環境を含めた視点で現在の資料を取り巻くさまざまな状況を体系的に捉える。そのうえで資料の保存活用における課題の解決に向け、将来的な維持管理、活用に関して、行政においては武雄市のまちづくりや教育に関する計画と関係を持たせる。かつ市民協働のもとに、適切な保存環境の確保、調査・研究の推進、計画的な修理、定期的な企画展・関連イベントの開催、学校教育・生涯学習との連携、観光客への情報発信などについて計画を策定することとした。

3 計画の位置付け

本計画は、武雄市の上位計画である「もっと輝く☆スター戦略☆（第2期武雄市まち・ひと・しごと創生総合戦略）」に即しており、文化、観光分野で連携した取り組みを推進するとともに、地域間、経済圏など広域での連携・協働を推進し、新たな人の流れと交流の創出を図っている。

また教育分野においては、武雄市における教育の基本方針を示している「武雄市の教育」において、文化財の保護・伝承と活用による伝統文化の継承、歴史的資源を活かした郷土愛の醸成など市民総参加による教育の推進を図っている。

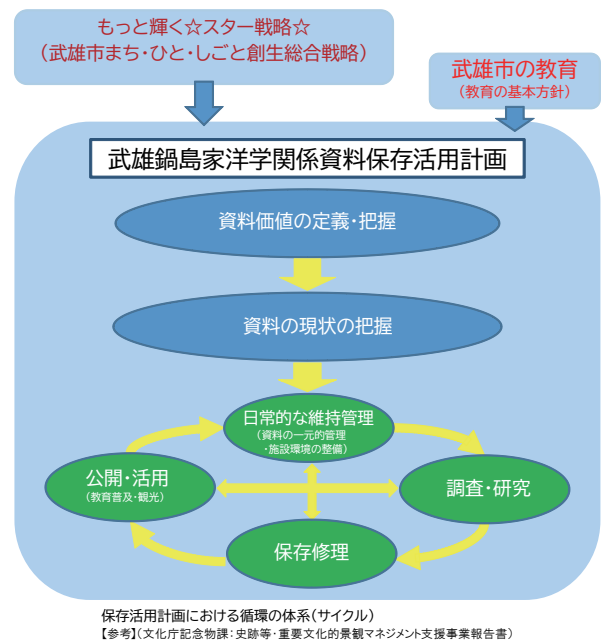
本計画は、この2つの計画に即して策定するものであり、2つの計画における根拠となる記述については次のとおりである。

もっと輝く☆スター戦略☆Ⅱ (令和2年度～令和6年度)	<p>基本目標</p> <p>④人と人との交流が生まれ、心がつながるまちをつくる</p> <p>【基本方向】</p> <p>西九州新幹線開業を契機に、佐賀と長崎をつなぐ拠点都市として、新たな人の流れと交流の創出を図る。</p> <p>観光、文化、スポーツ等の分野について、連携した取り組みを推進するとともに、一つの自治体の枠にとらわれず、地域間や経済圏など広域での連携・協働を推進する。</p> <p>住んでいる人が武雄の魅力を知り、誇りをもつこと、そして、地域と継続的に多様な形でかかわる地域のファンやリピーター等「関連人口」の創出・拡大を図ることが必要である。</p> <p>国や地域、個人で異なる嗜好を踏まえ、日常の中にある資源や武雄の強みを効果的に「情報発信」することにより、認知度を向上させる取り組みを推進する。</p> <p>【具体的施策】</p> <ol style="list-style-type: none">(1) 国内・海外誘客の促進(2) 効果的な情報発信(3) 文化・スポーツの振興
--------------------------------	---

武雄市の教育 (令和4年度)	基本目標
	Ⅲ 明日につながる伝統文化の承継と多彩な文化の創造
	【重点事項】
	2 文化財の保護・伝承と活用 〔具体的施策〕 ・国重要文化財 武雄鍋島家洋学関係資料の保存・活用
	基本目標
	V 郷土愛の醸成と協働する市民総参加による教育の推進
	【重点事項】
	1 地域のよさや伝統を生かしたふるさと教育の推進 〔具体的施策〕 ・歴史的資源を活かした郷土愛の醸成

「武雄鍋島家洋学関係資料」の保存活用は、本計画をもって完了するものではなく、武雄市のまちづくりや資料の価値、活用方法の新たな展開に応じて、計画自体の見直し・再策定の作業を通じて発展させる必要がある。

以上の点を踏まえ、資料を取り巻く地理的・社会的環境（第2章）、資料の歴史的概況及び指定までの経緯や資料の価値（第3章）をまとめる。そのうえで、過去の状況を含めた資料の現状と課題を整理することにより（第4章）、資料の理想的な将来像の実現に向けた基本方針を明確にする。さらに、「武雄鍋島家洋学関係資料」保存活用を実施するために必要な事業について検討し、今回の計画期間内に推進する具体的な事業と将来的に考察を要する事項について示す（第5章）。



4 計画期間

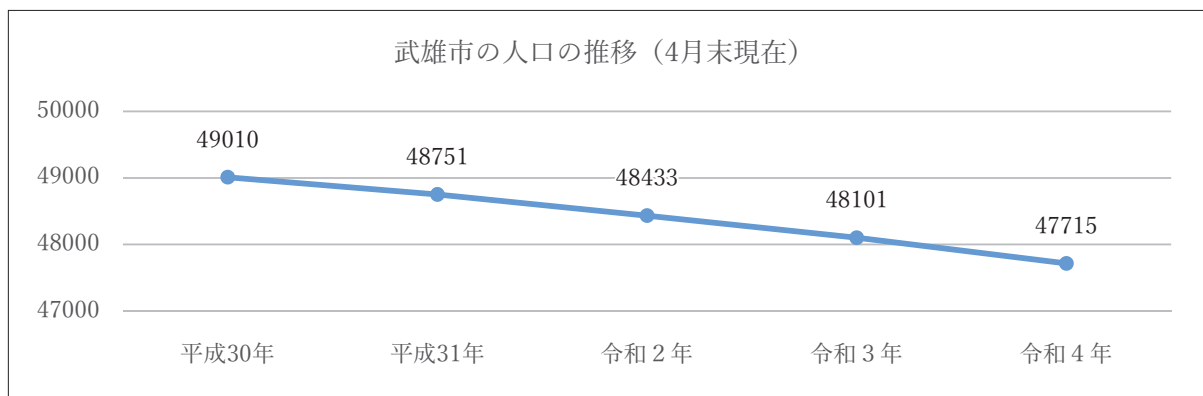
令和5(2023)年度～令和9年度の5か年とする。

第2章 武雄市の概要

1 武雄市の概要

(1) 概要

武雄市は、佐賀県の西部、北緯 33 度 10 分、東経 130 度に位置する都市である。



人口は直近の5年で49,101人（平成30(2018)年）から47,715人（令和4(2022)年）となり、緩やかな減少傾向にある。

平成18年3月1日に、旧武雄市（昭和29(1954)年に武雄町・朝日村・橘村・若木村・武内村・東川登村・西川登村が合併して市制施行）、山内町、北方町の1市2町が合併し、誕生した。

北は伊万里市・唐津市・多久市に、東は杵島郡白石町・大町町に接している。南は嬉野市、および長崎県波佐見町と接し、西は有田町を挟んで長崎県佐世保市につながっている。それぞれの境界には、黒髪山山系・八幡岳山系・杵島山山系・神六山山系がある。

(2) 自然環境

長崎自動車道武雄北方インターを降り武雄の市街地方面に向かうと、目前に3つの峰から構成される御船山が眺望できる。周辺には史跡などが多く残されており古くから市民に親しまれている。

また、武雄市の西端に位置する黒髪山は、県内で最も古い県立自然公園で、古来より霊場として知られている。頂上に露出している天童岩や青螺山南麓との間に雄岩・雌岩などの巨岩がそびえ、迫り来るような景観を見ることができる。

北西部は、武雄市の最高峰である八幡岳や眉山が、南部は、日本三大歌垣の1つとして知られる杵島山、南西部は神六山、北東部は徳連岳がそびえ、武雄市の周囲を囲んでいる。

武雄市の河川は、南西から北東へ流れる六角川と北流する松浦川の2つの一級河川とその支流、二級河川塩田川の支流・小田志川からなる。2つの一級河川の源流の山である神六山は海拔447mの高さしかないので、流域の保水力が大きいとは言えない。そのような状況の中で、昔から生活用水や農業用水の確保に苦勞してきた歴史があり、そのため殆どの谷に農業用ため池などを造成、その数は市内およそ450か所に及んでいる。

一方、下流域の穀倉地帯は低平地で、低平地河川特有の内水被害に長い間悩まされてきた。決して恵まれているとは言えない自然条件の中で、佐賀本藩領・蓮池藩領・武雄領が混在した三方湯（三法方、三法湯、三方方とも書かれる）と称される地域の水システム（橘町の大日堰や生見の石井樋など）や北方町の永池ため池など、現代河川工学も及ばないような河川総合施設（治水・利水・舟運）



【位置図】

が、治水の神様とも呼ばれた佐賀藩士成富兵庫茂安により築造され、この施設は今も活かされている。さらに石井樋の石材は近接する史跡であるおつぼ山神籠石が使われ、永池のため池の東側には永池古墳が残されている。

(3) 社会環境

① 交通

福岡市・佐賀市から長崎市・佐世保市へ通じる九州の主要な幹線ルート（長崎自動車道・西九州自動車道・国道34号・国道35号・国道498号）上に位置している。

江戸時代、小倉から長崎に至る57里（約223.8km）をつないでいた長崎街道は、多くの人々が往来した。武雄領内の道筋は、はじめ、嬉野～塩田～橋（現武雄市橋町）～北方を通る南コースであったが、河川のたび重なる氾濫により通行が困難となることも多かったため江戸中期以降、嬉野～武雄（塚崎）～北方のコースに変更された。

また、鉄道については、明治28（1895）年の鉄道開業以来、長崎までの沿線上の駅「武雄駅」（現在は「武雄温泉駅」）を中心に市街が発展した。現在はJR佐世保線上の駅であるが、令和4（2022）年度には、西九州新幹線（武雄温泉～長崎間）が開業し、西九州における交通の要衝として、今まで以上の期待が集まっている。

② 産業

武雄市の経済を支えるのは観光・農林業・商工業である。

農林業は、多品目にわたる農作物と、全国的に知名度の高い畜産との多種にわたる複合経営が行われている。

商工業では、小規模事業所が多く、企業を誘致するための工業団地の開発など、計画的な誘致と基盤整備事業を行っている。

③ 観光

「いで湯と陶芸の里」として、観光は武雄市の特徴の1つでもある。竜宮城を思わせる武雄温泉の楼門（重要文化財「武雄温泉新館及び楼門」）などの観光地における景観は、武雄市のイメージを代表するものとなっている。

江戸時代、塚崎（武雄）は、小倉から長崎に至る長崎街道の宿場の1つであった。現在においても市内随所に当時の面影を残しており、日本で最初の種痘に成功したと言われる中村涼庵の旧宅や、敵の侵入に備えるために作られた鍵型道路などが残っている。

また、乳待坊公園や神六山公園、きたがた四季の丘公園など7か所の公園は、自然のもつ豊かな資源の活用を通じ市民の憩いの場として、スポーツ・レクリエーションの場として活用されており、今後、観光レクリエーションの場としての活用が図られている。

武雄市では、こうした自然や、先人から受け継いだ文化や歴史、温泉、陶芸など地域の文化的資源などを核とし、「点」で滞在することが多い観光客を、「線」「面」への広がりへつなげ、滞在時間を延ばすことを目指している。



重要文化財 武雄温泉楼門

江戸時代には、長崎街道塚崎宿の本陣がおかれた。

1830年代には、木筒・砲架・車台などの細工場が湯元（武雄温泉）ないしは近隣地にあった。



黒髪山 夫婦岩

古老の言い伝えでは、黒髪山の岩窟で火薬の原料の1つである硝石が採取されたとされる。



長崎街道沿いにある

長崎街道物語公園

（宮野町夢本陣）

白壁に埋め込まれた陶板には、モルチール砲などが描かれている。

(4) 武雄鍋島家の歴史的概要

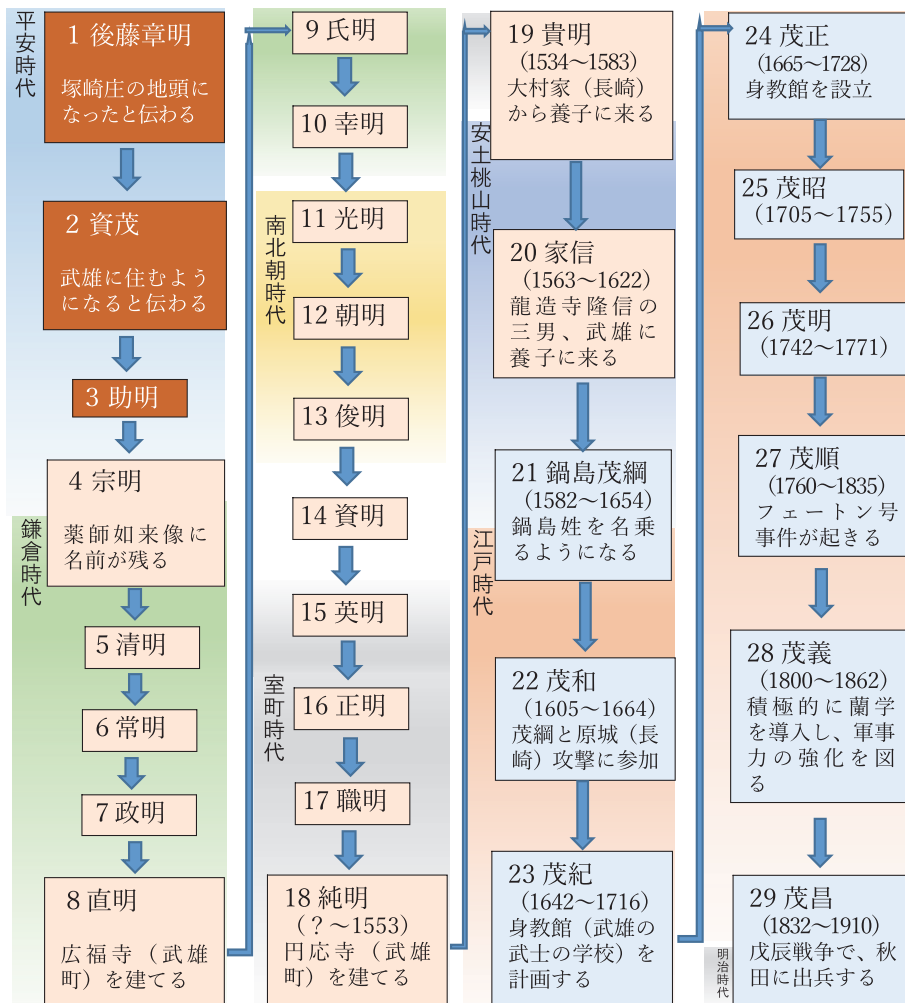
武雄鍋島家の起源は平安時代に遡り、かつては後藤を称していた。10世紀半ばに奥羽地方で起こった前九年の役(1051~1062)で戦功のあった後藤^{のりあきら}章明^{つかぎのしょう}がその功勞により墓崎^{つかぎのしょう}莊(現在の武雄市の一部。塚崎、柄崎とも記載される)の地頭に任命されたのが始まりとされる。12世紀前半、その子資茂が墓崎に下向、富岡村湯里^{ゆかり}に居住したとされるが、資料で実在が確認できるのは4代目以降である。

この後、後藤家は杵島郡内の有力豪族に成長、16世紀後半の戦国期、19代後藤^{たかあきら}貴明の時、その勢力は最大となったが、一族内の混乱から肥前国を代表する戦国武将龍造寺隆信の勢力下に吸収され、隆信の三男家信を養子に迎えて当主とした。

さらに戦国末期から近世初頭にかけての混迷期、肥前国内の実権が龍造寺氏から鍋島氏へ移行する過程で、後藤家も鍋島氏の傘下に入った。21代茂綱の時には、後藤→龍造寺→武雄と改姓を重ねたものの、寛永11(1634)年からは「鍋島」を名乗るようになった。いかにも江戸時代初期の鍋島政権成立期の不安定な権力構図を映じているといえる。

江戸時代、武雄鍋島家は鍋島藩政のもと、龍造寺系の他の三家、諫早家・多久家・須古鍋島家とともに親類同格に列せられ、「大配分」(自領内での大幅な自治権)を受け、佐賀藩^{うけやく}の請役(家老)をも務める家柄となった。

【武雄後藤家・鍋島家系図】(■ は実在を裏付ける資料が無い人物、■ は後藤姓、■ は鍋島姓)



第3章 「武雄鍋島家洋学関係資料」の概要

1 資料の概要

佐賀藩の武雄領（邑）鍋島家に伝来した、江戸時代後期の西洋文物導入期から、戊辰戦争に至る期間の洋学関係の一括資料群である。

文書・記録類は、鍋島茂義（1800～1862）・茂昌（1832～1910）期の武雄鍋島家が収受、作成した文書・記録と、戊辰戦争期を中心とした書状群に大別される。文書は武雄領での洋学摂取や、西洋砲術を核とした近代軍制の整備、火器・銃砲そのほかの輸入機械の注文・購入の覚書類、奥羽出兵時の新政府からの布達・沙汰書、戦線にて往復された、銃砲・弾薬・軍事物資の消費、運搬、補給に係る覚書や士卒の軍中での通行手形等が含まれる。記録は、武雄領士卒の名簿類、長崎貿易での西洋文物や火器・銃砲の注文・購入記録、茂義の手になる舶来植物を模写した図譜類などで、特に天保9年（1838）から文久2年（1862）の長崎貿易の注文書控「長崎方控」4冊には、多数注文品・到来品が記録され、蘭書をはじめ同家が入手した品目が通覧される貴重な資料である。

標本類は、茂義手製の「腊葉」が残される。中国、琉球、ヨーロッパ産の舶来植物を押し花にし、オランダ名を注記する。「ダーデルボーム（ナツメヤシ）」の標本には「嘉永七庚寅」の貼紙があり、茂義の御手元本と推測される。

和書・訳書類は、茂義・茂昌収集の典籍類で、西洋砲術・軍制を中心とした軍事、化学、技術、西洋医学の本が集中する。

洋書類は、蘭書と一部の英書で、百科事典、化学、語学、軍事、医学、物理学、植物学、航海術、機械工学、幾何学、天文学、測量術、理化学機器カタログ等多岐の分野にわたる。

絵図・地図類は、長崎伊王島台場図や戊辰戦争期の戦略的地図等、砲術との関連性が強い。

また図面類は、大砲およびその製造にかかるもので、外国製原図、同印刷図面、同図面写およびわが国で作図された原図またはその写の4つに大別される。この中にはモルチール砲等各種砲の切形類も含まれる。

写真には上野彦馬の写場での撮影と推測される台紙貼写真が残される。

最後に本件を特徴づける器物類は、軍事、天文・測量、科学、その他に大別される。軍事関係の器物では、モルチール砲、試薬モルチール砲、ボンベン野戦砲（施条カノン砲）、ナポレオン式四斤野砲の4門が遺存する。アムステルダムのファルク工房による地球儀・天球儀一対や、5種の望遠鏡、セキスタント等の天文測量器具のほか、エレキテルも現存する。またランビキや乳鉢・乳棒、ガラス製漏斗、三口ガラス器、白磁製乾溜器等のガラス器や磁器、オランダのフォッケ・メルツァー社製のホクトメートルや、顕微鏡などの実験器具も多数確認されるほか、絵具（ウルトラマリンブルー等）も残されており武雄鍋島家の西洋学術への広範な関心を示す。

以上のように本件は、情報源である洋書・輸入図面、入手或いは需要に係る記録、実物と言う3種の異なる資料を含んでおり、わが国における幕末期の西洋学術・科学技術の受容史において、また軍事技術・兵学の発達史において貴重なまとまった資料群と位置付けられるものである。

「月刊文化財（609号）」（平成26年6月1日発行）より引用
（文中の漢数字は算用数字に改めた）

2 歴史的概要

17世紀半ばに始まる、いわゆる「鎖国」の時代、江戸幕府は、福岡藩と佐賀藩に対して隔年で長崎の御番（警備）を命じた。また、長崎湾内の島嶼は佐賀藩領であったため、ここは独自に警備を行う義務を課せられた。このため、員数の多寡はあるものの、当番年、非番年を問わず佐賀藩は多くの警備兵を長崎に駐留させることになった。武雄も多久領と共に沖ノ島の警備番を担当している。

武雄の領主鍋島茂義が誕生した19世紀初頭、日本を取り巻く世界情勢は大きく動き始めようとしていた。

文化元（1804）年、ロシア使節のレザノフが長崎に来航、通商を求めた。また、文化5年にはイギリスの軍艦フェートン号が長崎に侵入、オランダ商館員を人質にして乱暴をはたらく事件が起こった。これら異国船の侵入事件は、いずれも佐賀藩の当番年に起こり、しかもフェートン号事件は、佐賀藩の警備の怠慢を曝け出すものであったため、藩主鍋島齊直は幕府から閉門を言い渡された。この失態が藩内に臥薪嘗胆の気概を生み、幕末にかけての佐賀藩活躍の原動力につながった。

文政5（1822）年11月1日、22歳の若さで鍋島茂義は佐賀藩の請役に就任した。

茂義が趣味として絵画を愛好したことは知られるが、武雄に残る絵画資料には、10歳の貞丸（佐賀藩主鍋島直正の幼名）の望みで24歳の茂義が描き与えた絵が含まれる。佐賀藩の請役という重職にあった茂義は、同時に直正の良き兄貴分でもあった。

さらに文政10年2月には、直正の姉^{ちようひめ}寵姫との婚礼が成り、茂義は、実態においても直正の義兄となった。直正の義兄という間柄もあわせ考える時、茂義は、直正に対し長く指導的な関係を維持したものである。

佐賀藩の負担となった長崎御番だが、反面、佐賀藩と蘭学を深く結びつける重要な要因となった。

とりわけ、鍋島茂義は、長崎からもたらされる海外の情報や文物に強い関心を抱き、天保年間（1830～1844）の初め頃から武雄領にこれらを積極的に導入した。武雄に残る武雄鍋島家資料の中で、他地域に残る家資料と比して光彩を放つのは「武雄蘭書」全138冊をはじめとする多くの蘭学資料であり、その資料群の質と量の豊かさはまさに武雄鍋島家資料の核とも言うべき存在として注目される。

天保3（1832）年、茂義は武雄鍋島家の家督を相続すると同時に、家臣の平山醇左衛門を長崎の西洋砲術家高島秋帆のもとに入門させ、その2年後には自らも門下となり武雄領への積極的な西洋砲術導入を開始した。茂義が息子の茂昌に家督を譲り、形の上で領主の地位を退いた天保10年以降も蘭学への興味は続き、武雄に残された蘭書や器物類の蘭学資料はその多くが茂義の蒐集によるものである。

茂義の跡を継いだ茂昌も西洋科学の摂取を進め、特に軍備の増強を図った。武雄鍋島家資料中の慶応2～4（1866～1868）年の「長崎御注文方控」は、茂義が残した「長崎方控」と同様、武雄の長崎での買い物帳で種々の器物・製品の注文がなされているが、世相を反映してか、大砲・小銃など武器の記述が多く見られる。

慶応4年1月、旧幕府軍と新政府軍の間で戊辰戦争が勃発、佐賀藩は新政府軍として参戦した。同年5月、動員命令を受けた武雄の領主鍋島茂昌は出陣の途上、京都に立ち寄り、朝廷から「其方、武術拔群、且つ兵隊精練の趣、天聴に達し、先般御沙汰仰せ出され候處、此度上着、御満足に思し召され候」という褒詞の勅諭を受け、同時に激励のしるしに錦の御旗、天杯、軍扇、晒布などを拝領した。800余名からなる武雄隊は秋田へ出兵、旧幕府軍との戦闘にあたった。アームストロング砲など最新の軍備を擁する彼らの活躍は敵・味方を問わず人々を驚愕させた。

関連年表（青字：佐賀藩の動き、緑字：全国の動き）

和 暦	西暦	月 日	出 来 事
寛政12	1800	10月25日	武雄の鍋島茂義、佐賀の武雄鍋島家屋敷で生まれる
文化元	1804	11月17日	ロシア特使レザノフのナデジュダ号が来航、通商要求
文化5	1808	8月15日	イギリス軍艦フェートン号長崎港に侵入
		11月9日	フェートン号事件での警備の怠慢を責め、佐賀藩主鍋島齊直、および佐賀藩に100日間の閉門（謹慎）を命ず
文化11	1814	12月7日	鍋島直正、江戸桜田の佐賀藩邸に生まれる
文政5	1822	11月	鍋島茂義、藩の請役に初めて就任する
文政8	1825	7月15日	異国船打払令
		12月27日	直正 将軍家斉の娘（盛姫）と結婚
文政9	1826	1月11日	シーボルト、江戸参府に同行し武雄温泉に入浴
文政10	1827	2月	鍋島茂義、直正の異母姉寵姫と婚礼の儀
文政11	1827		シーボルト事件
文政12	1829	11月	寵姫逝去
文政13	1830	2月	鍋島直正、佐賀藩第10代藩主に就任
天保3	1832	8月1日	鍋島十左衛門茂義、家督を相続。武雄領主となる
			同月、平山醇左衛門、鍋島茂義の命により佐賀藩から初めて長崎の高島秋帆（四郎太夫）の門下となる
		9月1日	鍋島茂義、長崎御仕組（長崎警備）頭人となる
天保5	1834	(春)	鍋島茂義、最新式の蘭式角石付劔長式刃筒（燧石銃）1挺を購入
		9月	鍋島茂義、藩主に同行し長崎へ行く
			鍋島茂義、荻野流砲術師範高島四郎兵衛・四郎太夫へ入門。平山醇左衛門、「御稽古御取次」役となる
		12月	鍋島茂義、「御砲術方御手伝」を組織
天保6	1835	5月9日	鍋島茂義の実弟、坂部三十郎明矩と武雄家臣団33名が連署し、茂義に対して血判起請文「高島流神文納」を提出
		8月6日～11日	高島秋帆、武雄へ来る。領内の処々見分する。日本人により初めて鑄造された西洋式大砲モデルチール砲を武雄に持参
天保7	1836	4月14日	鍋島茂義、高島秋帆より「高島流砲術御皆伝」を允許される。砲術皆伝状「荻野流鉄砲抱目録」が下付される
		6月	鍋島茂義、「御砲術方御手伝」を「御火矢方組」に改編
		10月18日	武雄の儒学者清水龍門、武雄領内で鑄造の蘭筒銘を制作。この頃、武雄で初めて大砲の鑄造に成功
			平山醇左衛門、長崎に出張し、高島より砲術の直伝を受け、高島招聘に尽力する
			この頃、武雄領でガラス製作が始まる
天保8	1837	3月	武雄領内の真手野村（現在の武雄市武内町内）の台場で武雄の家臣団による砲術演習開始
		4月18日	「御火矢方」を「石火矢方」と改称、砲術研究の体制が強化される
		9月16日	高島流砲術の皆伝を受けた鍋島茂義による初めての試射が実現
		9月18日	真手野で武雄家臣団による初めての大規模演習が行われる
天保9	1838		この年、「長崎方控 二」が書き起こされる
			武雄領内で、木筒による相図玉の打ち上げが盛んに行われる
天保10	1839	9月1日	鍋島茂義、家督を子の茂昌に譲る
			この年の末頃、台場を真手野村から永野村（現在の武雄市東川登町）に移す
			蛮社の獄
天保11	1840	9月6日	佐賀藩主鍋島直正初上覧のもと、神埼郡岩田（現在の神埼市神埼町尾崎）で武雄家臣団による大規模西洋砲術演習を実施
			この後、鍋島茂義を佐賀藩の砲術師範に任じ、本藩の家臣たちにも西洋砲術の修行を命ずる
			同月、高島秋帆、幕府に対し西洋砲術採用を進言する「天保上書」を提出
		11月	平山醇左衛門「ペキサンス大砲絵図」を長崎に発注
			清国でアヘン戦争が起きる（～42）

和 暦	西暦	月 日	出 来 事
天保12	1841	5月9日	武蔵国徳丸原（現在の東京都板橋区高島平付近）で、高島秋帆・浅五郎父子が指揮を執り門弟総勢100名による西洋砲術および洋式軍隊の大演習実施。佐賀藩から武雄の平山醇左衛門、本藩の丹羽作兵衛・永淵藤五郎参加
天保13	1842	10月	佐賀藩、十五茶屋に「蘭伝石火矢製造所」を置き、大小銃砲の制作を開始。製造方に平山醇左衛門、また、鋳物師も武雄の谷口良三郎が主任として名を連ねる
		10月2日	高島秋帆、長崎で捕縛。揚屋（江戸上伝馬町の牢屋）入りを命ぜられる（長崎事件）
		9月および12月	佐賀藩士の調練が武雄の永野台場で、武雄の家臣の指導のもと行われる
天保14	1843	3月25日	高島流銃陣と備打ちの演習が藩主直正上覧のもと、武雄で行われる。調練参加者は、指図役の平山醇左衛門を除き、本藩藩士により構成
		5月15日	平山醇左衛門捕縛、収監される
		9月20日	藩主直正から武雄の鍋島茂義に対して「蘭砲術稽古人取立、懇ニ教導有之」として褒美の白銀50枚が下賜される
		11月21日	平山醇左衛門、「無調法有之」として、武雄領内白木塞で斬首刑に処せられる
天保15	1844	2月10日	オランダ、ファルク工房の天球儀・地球儀、武雄にもたらされる
		7月2日	オランダ国王開国勸告（パレンバン号来航）
		9月	藩主直正、オランダ軍艦パレンバン号に乗り込み見学。当時、世界最強のボンベカノン（ペキサンス砲）を見る
			この年、佐賀藩、オランダから大モルチール砲購入。伊王島に配備
弘化2	1845	10月	鍋島茂義、ペキサンスの原書『フランス海軍によるボンベカノン試射実験』（1824年刊）を購入。翌年8月までに武雄領抱えの長崎のオランダ通詞西記志十に翻訳させる
嘉永2	1849	8月22日	鍋島直正 嫡子淳一郎に種痘を施す
嘉永3	1850	12月	佐賀藩、城下築地に日本初の反射炉建造に着手
嘉永4	1850		島津斉彬薩摩藩主となり、集成館事業開始
嘉永5	1852	11月	佐賀藩、理化学研究所「精煉方」設置
嘉永6	1853	6月	ペリー艦隊、浦賀に来航
		7月	ロシア使節ブチャーチン、長崎に来航
		8月	幕府、佐賀藩に大砲200門を注文
		9月	佐賀藩、36ポンドカノン砲25門、24ポンドカノン砲25門の合計50門受注
安政元	1854		鍋島茂義、佐賀藩の蒸気船製造主任に任命される
			ペリー 再来航、日米和親条約締結
安政2	1855		この年、ペテルス・レゲー艦のオランダ焼物、武雄にもたらされる
			長崎海軍伝習所設置、佐賀藩より大量派遣。武雄から馬場磯吉も参加
安政5	1858		安政の大獄（～59）
文久元	1861	11月	藩主直正隠居、家督を嫡子直大に譲る。その後閑叟と号す
文久2	1862	11月27日	鍋島茂義、逝去。「長崎方控 五」の記述終わる
慶応元	1865		三重津造船所にて日本初の実用蒸気船、凌風丸竣工
慶応2	1866	8月	鍋島茂昌、佐賀藩請役に就任
慶応3	1867	12月24日	鍋島直正、薩摩藩・長州藩を中心とする討幕軍への参加を決意
慶応4	1868	5月	上野戦争に佐賀藩が出動、アームストロング砲が活躍
		5月27日	「多年西洋砲術研究練兵の趣聞し召され候につき」として武雄領主鍋島茂昌に出兵命令下る。スペンセル後装の7連発銃450挺、レミントン銃100挺、アームストロング砲4門、フランスボーム砲（モルチール砲）2門ほかを装備
		7月17日	鍋島茂昌、参内し天皇に拝謁。「其方武術拔群兵隊精練」の勅諭を受け、羽州（秋田方面）へ出動
		11月25日	武雄軍団、武雄へ凱旋
明治4	1871	1月18日	鍋島直正（閑叟）、逝去
		11月12日	岩倉米政使節団、横浜を出港。武雄出身の山口尚芳が副使として参加する
明治7	1874	2月	佐賀の乱が起こる
明治43	1910	3月15日	鍋島茂昌、逝去

3 重要文化財指定までの経緯

昭和44(1969)年、武雄鍋島家邸(旧別邸地)と庭園を含む不動産を武雄市が旧領主武雄鍋島家から購入した際に、敷地内の土蔵に収蔵されていた多数の貴重資料が武雄市に寄贈された。土蔵は老朽化しており、雨漏りや虫害、埃などにより、収蔵されていた資料が損傷・劣化していたが、昭和初期に武雄鍋島家当主であった男爵鍋島綱磨により整理された状況で散逸することなく保管されていた。

母屋も老朽化していたこともあり、武雄鍋島家邸はその直後に解体され昭和50年現在の武雄市文化会館(所在地:佐賀県武雄市武雄町大字武雄5538番地1)が建設された。資料を収蔵していた土蔵は、現在もこの敷地内の庭園の一隅にその姿をとどめている。

武雄に残されたこれらの貴重資料は、武雄市文化会館建設後、館内の3つの部屋に分散して保管された。土蔵から直接移されたのではなく、一時的に旧武雄市役所庁舎(所在場所:佐賀県武雄市武雄町大字昭和1番地1)近くの倉庫に移され整理をされたようだが、移動の時期など、その詳細は不明である。

3つの部屋は、もともと研修室・会議室として造られたスペースであり、一方の壁の面積の2分の1以上を占める窓があることに加え、西日が当たる外壁に面している部屋があるなど、収蔵環境として十分とは言えなかった。

武雄鍋島家からの寄贈資料は、平成12(2000)年、収蔵環境・展示環境を整えた武雄市図書館・歴史資料館の完成にともない、同館の特別収蔵庫に移し、同年10月1日の開館により一般に公開するに至った。

ただし、「武雄の蘭書」と称される、洋書を中心とした138冊の典籍



文化会館庭園と土蔵



市民の浄財で文化会館庭園に建立された鍋島茂義銅像

は、昭和12年には武雄鍋島邸内にあったことが、有馬成甫氏の『武雄の蘭学』(昭和37年刊行)に記されている。昭和30年代に、鍋島家当主の意向で、佐賀県立武雄高等学校の図書館に移されたが、平成10年6月、武雄市図書館・歴史資料館の建設を受けて武雄市に寄託され、一時的に武雄市文化会館内に保管した。その後、他の資料と共に歴史資料館の特別収蔵庫に移し、平成20年9月に武雄市に寄贈されている。

これらの資料は、すでに昭和53年から、武雄市出身で、当時、九州大学文学部助教授であった中村質氏(故人)を中心に丹念な調査が実施され、『武雄鍋島家文書目録』(武雄鍋島文書目録調査事業昭和53年度～55年度)にまとめられた。さらに、佐賀大学教育学部教授であった米倉利昭氏(故人)を主任調査員とした武雄鍋島家歴史資料目録調査事業で『武雄鍋島家歴史資料目録(前編)』(昭和56年度)、『武雄鍋島家歴史資料目録(後編)』(昭和57年度)が整理された。いずれも国・県の調査指導と補助金を受けた事業である。昭和63年度には、補完篇としての『武雄鍋島家歴史資料目録(続編)』が武雄市教育委員会により刊行された。

資料総数は合計16,386件を数え、その内訳は、「文書関係」が3,349件、以下、「絵図・地図関係」163件、「書籍(和書)」8,007件、「書籍(漢籍)」2,446件、「歴史資料関係」2,218件、「設計図関係」65件、「武雄の蘭学関係」138件となっている。

いずれも武雄鍋島家において長い年月にわたり保管されてきた来歴を有する貴重な資料であるため、武雄市図書館・歴史資料館開館当時から、資料の来歴を明らかにする意味で、武雄鍋島家資料として、その他の寄贈、寄託、購入による資料と区別し、呼び分けることにして今日に至っている。

平成26年8月21日、武雄鍋島家資料のうち、蘭学・洋学に関連する資料が「武雄鍋島家洋学関係資料」1件(2,224点)として国の重要文化財としての一括指定を受けた。

重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」の価値

川副 義敦

武雄では、およそ天保年間(西暦1830～1845年)中期頃から、西洋の学問(洋学)として蘭学の導入を積極的に行ってきた。その背景には、江戸時代前期の寛永19(1642)年以来、佐賀鍋島藩と福岡黒田藩が隔年で担当した、西洋に向けて唯一開かれた貿易港長崎の警備(御番)があった。

とくに、19世紀に入ると、蒸気船が発明され、航海時間が短縮、航行距離も延長したことから、西洋諸国の船が日本近海にも頻繁に出没するようになった。こうした事情を反映して、武雄では長崎警備との関係からもいち早く西洋世界に接近し、蘭学(洋学)の導入を開始した。その動機が、多くの洋学関係資料が武雄に残されることにつながった。本来は、長崎、ひいては日本防衛のための西洋砲術や調練の研究が出发点であったが、徐々にその興味や必要の幅も広がり、様々な方向へと展開した。

かつて、有馬成甫氏は『武雄の蘭学』(1962年 武雄市教育委員会)で、「武雄の蘭学は、結局、佐賀藩の蘭学の先駆となりその成果を挙げたとみるべきである」と記した。

その評価は、半世紀以上を経た今日もお色褪せることはなく、むしろ、その評価を後押しする多くの成果を生んでいる。「武雄鍋島家洋学関係資料」の重要文化財指定がその証左でもある。その数2,224件におよぶ一大文化財群である。

加えて、有馬氏は、武雄に残る三つの興味ある事績として、平安時代中期以来土着した後藤氏(鍋島氏)が現在も連綿として続いていること、武雄神社が古い由緒とともに多くの古文書を所有

していること、加えて「逸早く天下に先んじて19世紀の西洋文化を採り入れた記念物がよく保存されていること」として武雄の洋学資料群を挙げている。

まさに、今に残る138冊の武雄蘭書や、モルチール砲をはじめとする西洋砲術と西洋式軍隊訓練関係の資料、武雄のサイエンスを象徴する天・地球儀、望遠鏡や理化学実験器具などの数々、さらに武雄の洋学研究の延長上にある戊辰戦争の関係資料など、重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」は、全国に分布する洋学資料の白眉である。

武雄蘭書の分析から研究者らが「(武雄領では)購入した原書の内容を理解し、必要に応じて翻訳させていたことがわかった」と評するように、蘭書に限らず、武雄に残された資料の大半は、闇雲に集めたものでも偶然に集まったものでもない、武雄で行われた西洋文明、文化の調査と研究が、さまざまに連関をもって蒐集され、時代を越えて今の武雄に存在するのである。

重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」は、いささか乱暴な分け方かも知れないが、大別すれば、西洋渡来の文物とそれに関連するものと、戊辰戦争関係の資料に大別される。言い換えれば、武雄の領主鍋島茂義と、その子茂昌の時代に蒐集された文物や文書類が中心を占めている。

それら資料群のなかでも注目を集めるのが、四冊の小冊子からなる「長崎方控」である。一冊目が存在すると推測されるが、行方が分からず、二冊目から五冊目までが残されている。年代も天保9(1838)年から文久2(1862)年までの25年間におよぶ、武雄の蘭学導入の記録である。

この「長崎方控」を丹念に紐解くことで、鍋島茂義を中心とする武雄の洋学(蘭学)研究の展開を体系的に把握することが期待できると言える。

実際に、「長崎方控」は、各冊の前半部に、一年ごとに文物の注文月日が記され、また後半部にはそれらが武雄にもたらされた月日が記されている。それゆえ、武雄に数多く残された西洋渡来の文物類について、その履歴が確認できるものが多い。文字で記された資料があり、その実物が現在まで残り、しかもその導入の年月日までが判明するという驚くべき事実である。名前が分かり、モノがあり、履歴が残されている。名前・モノ・履歴の三者が確認できるのである。このことだけでも極めて稀有なことだと言えようが、それが一つや二つのモノにとどまらないという事である。

「長崎方控」は、文久2(1862)年の鍋島茂義の死によって記述を終えるが、その続編というべき資料が、「長崎御注文方控」(それぞれに表題は異なる)と総称される三冊の冊子である。慶応2(1866)年から慶応4(1868)年までの記録で、茂義の子茂昌の時代である。

武雄における地道で熱心な洋学導入の軌跡。一つ一つの努力の積み重ねがあって、江戸時代後期の貴重な武雄の資料群が形成されたと言える。

これら多くの文物に資料的な価値を予測し、今日まで残してきた武雄の先人らの見識に敬意を表すべきである。

江戸時代後期、武雄邑(領)で始まった西洋の砲術・軍事研究、蘭学の導入、そしてその延長線上にある、戊辰戦争で羽州(秋田・山形地方)への武雄軍団の出動。その背景を評価して、多数の戊辰戦争関係の資料までが重要文化財に指定された意義も大きい。

重要文化財「武雄鍋島家洋学関係資料」。この価値ある資料群が、国の宝として、武雄や佐賀のみならず、幕末日本の洋学史研究、科学技術史研究の分野での幹となると確信する。

今後の精華を大いに期待したい。